様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６３４
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３０７８

研究課題名（和文）近世日本「白話文化」の研究―唐話学・白話文学受容の文学史的位置づけ―

研究課題名（英文）The Study of "Baihua Culture" in Early Modern Japan: Positioning of the Acceptance of Towa Studies and Baihua Literature in the Literary History

研究代表者
丸井　貴史（Marui, Takafumi）

専修大学・文学部・准教授

研究者番号：２０８１６０６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本課題では、近世中期における白話小説受容の諸相について考察した。特に、大雅舎其鳳『太平記秘説』をはじめとする吉文字屋本浮世草子の分析と、上田秋成『雨月物語』における白話小説利用のあり方について、従来の研究を進展させることができた。また、日本で最も流布した短篇白話小説集である『今古奇観』の諸本に関する書誌調査の結果を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近世期における白話小説受容については、従来の研究が読本を主たる対象としてきたのに対し、本課題では吉文字屋本浮世草子に焦点を当てた。それにより、浮世草子の翻案が読本とは異なる方向性を志向していることや、その一方で初期読本が浮世草子に影響を与えた可能性のあることが明らかとなり、従来の小説史の記述を更新することができた。近世期の文化史・文学史を構築する上で、白話小説は看過し得ない存在であるが、本課題によって、その受容のあり方の一端が明らかとなったものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This project examines various aspects of acceptance of Baihua Novels in the middle of the early modern Japan. In particular, we have developed the previous research on the analysis of Kichimonjiya Ukiyo Zoshi, including Taigasha Kiho's "Taiheiki Hizetsu," and the use of Baihua Novels in Ueda Akinari's "Ugetsu Monogatari." In addition, we published the results of a bibliographic survey on various books of "Jingu Qiguan", the most popular collection of Short Baihua Novels in Japan.

研究分野：日本文学

キーワード：白話小説　大雅舎其鳳　上田秋成　雨月物語　今古奇観　吉文字屋

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

古来、日本の文化は中国文化の多大な影響のもとに発展を続けてきた。それは文学においても同様であり、物語・説話・随筆をはじめ、あらゆるジャンルにおいて漢籍の影響の見られないものはないと言ってよい。

その傾向は江戸時代に入っても変わらなかったが、この時代にはもうひとつの新しい文化が中国から将来された。それが「白話文学」である。文言で書かれていた従来の漢籍とは異なるこの新しい文学は、近世日本において広く受容され、白話文学を利用した作品が多く作られることになる。上田秋成の『雨月物語』などは、その代表的な例である。

上記のとおり、白話文学の存在は近世文学にとってきわめて重要な意味を持つものであるが、その影響の実態については未解明のことが多い。本研究では、翻案・翻訳・訓訳をはじめとする白話小説受容の諸相を検討することにより、近世日本における白話文化の実態を分析し、従来の文学史とは異なる評価軸から、近世文学史の再構築を試みる。

近世期の日本文学における白話小説の影響に関しては、受容の様相を通史的に描き出した石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（弘文堂書房、1940）と、読本の白話典拠を多く指摘した麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂、1946）という先駆的な研究がある。これら両者の業績を基盤として、中村幸彦が『近世比較文学攷』（中央公論社、1984）において近世文人と白話文学との関わりを整理し、徳田武は『日本近世小説と中国小説』（青裳堂書店、1987）において読本作者における白話利用のあり方を分析した。また、近年には中村綾が『日本近世白話小説受容の研究』（汲古書院、2011）において、唐話学の第一人者であった岡島冠山の文事を、主に『水滸伝』受容の観点から論じた。

このように、当該分野の研究は少しずつ進展しつつあるものの、その歩みは他分野に比して遅れている。その理由のひとつには、白話読解能力を有する日本近世文学研究者の人口が少なく、資料の分析が十分に進められていないという点が挙げられよう。白話文学の重要性が自明のことである以上、この現状は打開されねばならない。近世白話文化の実態を解明することは、近世文学研究における喫緊の課題であると思われる。

２．研究の目的

すでに定説となっているように、近世小説の一ジャンルである読本は、白話小説の受容を主たる契機として成立した。そして従来の白話文学受容研究は、大半が読本との関係性に焦点を当てたものであった。それらの研究が多大な成果を挙げたこと、また、今後もなお継続されるべきものであることは言うまでもないが、近世における白話文化を解明するためには、白話文学の影響が読本のみに留まっているわけではないことに、より注意を払う必要がある。そこで本研究では、最も積極的に白話文学が受容された 1700 年代を中心に、白話文学をめぐる近世日本の文化的状況を、総体的に把握することを目的とする。

３．研究の方法

(1)岡島冠山の研究

唐話学の第一人者であった冠山は、多くの唐話辞書のほか、『通俗皇明英烈伝』『太平記演義』などの文芸作品を著した。すなわち冠山は唐話学と文学を往還した人物であり、その文事や人的交流の研究は、近世白話文化の解明には不可欠である。本研究では、冠山およびその周辺人物の著作解題を整理し、唐話学と文学の相互関連性を検討する。

(2)小説における翻案手法の研究

初期読本に関しては少なからぬ研究が蓄積されているが、その大半は典拠に関するものであり、白話小説の翻案手法に関する研究は多くない。翻案においては、原話の持つ中国的要素に日本の古典や伝承を融合させる傾向が見られるが、その際、〈和〉〈漢〉の要素がいかなる位相で描かれているかを分析し、読本作者の白話受容態度を明らかにすることがこれからの課題であろう。また、これまでほとんど注目されていなかったが、大坂の吉文字屋から刊行された浮世草子には、白話小説を利用した作品が存する。それら諸作の翻案手法を検討し、浮世草子に白話小説を取り入れた書肆および作者の意図を明らかにする。

(3)通俗物の研究

中国小説の翻訳を一般に通俗物と称し、そのうち歴史小説を原話とするものを〈前期通俗物（通俗軍談）〉、それ以外の小説を原話とするものを〈後期通俗物〉と呼ぶ。そのうち本研究では、研究の蓄積がほとんどない後期通俗物を中心に検討する。通俗物を単なる翻訳とみなしていた従来の認識を改め、文辞を逐語的に検討することで、その背景にある唐話学の成果や、作品の文芸性について明らかにしたい。また、これらの作品に用いられた白話小説の中には、初期読本の原話となっているものも多く、影響関係の調査も進める。

４．研究成果

研究期間を通して特に集中的に取り組んだのは、吉文字屋本浮世草子における白話小説利用のあり方の研究と、白話小説受容の方法に関する浮世草子と読本の共通点・相違点の分析である。吉文字屋の専属作者と考えられている大雅舎其鳳は、『滅多無性金儲形気』をはじめ複数の作品において白話小説の翻案を試みているが、本研究においては、これまでほとんど検討の俎上に載せられることのなかった『太平記秘説』の分析を進めた。「翻刻 大雅舎其鳳『太平記秘説』（巻一・二）「同（三～五）」（『鯉城往来』22・23、2020 年 1 月・2021 年 1 月）は、その基礎作業にあたるものである。そして「庭鐘読本と『太平記秘説』―文体・舞台・素材―」（『日本文学』70-7、2021 年 7 月）において、本作における翻案のあり方について検討し、読本作家である都賀庭鐘の翻案手法と比較した。なお、其鳳と庭鐘を比較したのは、其鳳が庭鐘の作品を参考にしていた可能性が考えられるためであり、そのことについては、「初期読本と浮世草子―白話小説利用法からの検討―」（『和漢比較文学』65、2020 年 8 月）において指摘している。

また、上田秋成『雨月物語』における翻案のあり方に関する論考も発表した。『雨月物語』は近世文学の中でも特に研究の進んでいる作品であるが、白話小説の利用法や、それを踏まえた作品の解釈については、なお検討すべき問題が残る。本研究においては、「「死生有命」の和漢―「菊花の約」と白話小説―」（『日本文学』68-6、2019 年 6 月）と「秋成の文学と白話小説―「蛇性の婬」における原話の校合を例に―」（『アナホリッシュ国文学』10、2021 年 11 月）において、それぞれ「菊花の約」と「蛇性の婬」を分析した。

その他、日本において最も流布した短篇白話小説集である『今古奇観』の書誌調査をおこなった。「『今古奇観』諸本考補遺―本衙蔵板本・書肆不明本管窺―」（『就実表現文化』14、2020 年 1 月）は、拙著『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究―』（汲古書院）所収「『今古奇観』諸本考」において言及が不十分であった諸本についての書誌を整理し、『今古奇観』諸本の全体像を把握することに、いささかなりとも寄与することを目指したものである。

なお、研究期間中に論文化することはかなわなかったが、最終年度において「『太平記演義』序文の発憤説―公憤から私憤へ―」（神戸大学文学部国語国文学会シンポジウム「近世俗文芸の作者の〝姿勢（ポーズ）〟―序文を手掛かりとして」、2022 年 8 月 27 日）と、「『時勢花の枝折』の性格―往来物・類題集・艶書小説―」（小説史研究会、2023 年 2 月 25 日）の、ふたつの研究発表をおこなった。これらについては、翌年度以降の論文化を予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 丸井貴史	４．巻 6月25日
２．論文標題 ほんの裏ばなし（『読まなければなにもはじまらない　いまから古典を〈読む〉ために）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中日新聞夕刊	６．最初と最後の頁 4-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丸井貴史	４．巻 36
２．論文標題 紹介 木越治・丸井貴史編『読まなければなにもはじまらない―いまから古典を〈読む〉ために』、木越治著（木越俊介・丸井貴史編）『ひとまずこれにて読み終わり』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 北陸古典研究	６．最初と最後の頁 68-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丸井貴史	４．巻 10
２．論文標題 秋成の文学と白話小説―「蛇性の婬」における原話の校合を例に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アナホリッシュ国文学	６．最初と最後の頁 157-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丸井貴史	４．巻 70-7
２．論文標題 『太平記秘説』と庭鐘読本―文体・舞台・素材―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本文学	６．最初と最後の頁 12-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 丸井貴史	4．巻 66
2．論文標題 書評 田中則雄著『読本論考』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 和漢比較文学	6．最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸井貴史	4．巻 23
2．論文標題 翻刻 大雅舎其鳳『太平記秘説』（巻三～五）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 鯉城往来	6．最初と最後の頁 72-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸井貴史	4．巻 65
2．論文標題 初期読本と浮世草子―白話小説利用法からの検討―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 和漢比較文学	6．最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸井貴史	4．巻 65
2．論文標題 第三十八回和漢比較文学会大会公開シンポジウム「日本文学のなかの白話小説・再考」―その趣旨について―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 和漢比較文学	6．最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸井貴史	4．巻 14
2．論文標題 『今古奇観』諸本考補遺―本衙蔵板本・書肆不明本管窺―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 就実表現文化	6．最初と最後の頁 25-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸井貴史	4．巻 22
2．論文標題 翻刻 大雅舎其鳳『太平記秘説』（巻一・二）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 鯉城往来	6．最初と最後の頁 42-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸井貴史	4．巻 68-6
2．論文標題 「死生有命」の和漢―「菊花の約」と白話小説―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 52-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 丸井貴史
2．発表標題 『時勢花の枝折』の性格―往来物・類題集・艶書小説―
3．学会等名 小説史研究会
4．発表年 2023年

１．発表者名 丸井貴史
２．発表標題 『太平記演義』序文の発憤説―公憤から私憤へ―
３．学会等名 神戸大学文学部国語国文学会シンポジウム「近世俗文芸の作者の〝姿勢（ポーズ）〟―序文を手掛かりとして」
４．発表年 2022年

１．発表者名 丸井貴史
２．発表標題 「吉備津の釜」を読み直す
３．学会等名 吉備地方文化研究所シンポジウム「人文知のトポスVI　岡山と古典文学の世界」
４．発表年 2022年

１．発表者名 丸井貴史
２．発表標題 備前軍記の世界
３．学会等名 第1回正宗文庫セミナー（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 丸井貴史
２．発表標題 初期読本と浮世草子―白話小説利用法からの検討―
３．学会等名 和漢比較文学会大会公開シンポジウム「日本文学のなかの白話小説・再考」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

1．著者名 堀新・井上泰至（編）	4．発行年 2023年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 387
3．書名 家康徹底解読　ここまでわかった本当の姿	

1．著者名 木越治・丸井貴史（編）	4．発行年 2021年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 319
3．書名 読まなければなにもはじまらない―いまから古典を〈読む〉ために―	

1．著者名 染谷智幸（編）	4．発行年 2021年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 447
3．書名 東アジア文化講座1　はじめに交流ありき―東アジアの文学と異文化交流	

1．著者名 堀新・井上泰至（編）	4．発行年 2020年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 397
3．書名 信長徹底解読　ここまでわかった本当の姿	

１．著者名 勝又基・木越俊介（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 国書刊行会	５．総ページ数 586
３．書名 江戸怪談文芸名作選5　諸国奇談集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関